

新書紹介

ポスト・サーヴィス社会

“Sleepers, Wake!—Technology & the future of work”

バリー・ジョーンズ著 小倉利丸訳

時事通信社 A5判 四二〇頁 一、八〇〇円

本書は、オックスフォード・

ユニバーシティ・プレスから出

版された「眠れる者よ、目を覚

ませ！テクノロジーと仕事の未

来（現オーストラリア科学大臣

B・ジョーンズ著）の翻訳で、

訳者小倉利丸教授が内容に即し

て「ポスト・サーヴィス社会」

とされた。豊富な資料とオール

アラウンドな知識で、「来たるベ

き社会」について論じている。

我が国の第三次産業就業者率

は、昭和五十五年の国勢調査で

五五・四％に達している。この

背景として、一つにはマイクロ

エレクトロニクスを中心とする

「技術革新の進展」による生産

現場での自動化・省力化（FA）

による雇用の停滞または縮小が

ある。二十世紀最大の雇用部門

としての工業の没落が、サービ

業社会（サービス社会）から

「ポスト・サーヴィス社会」へ

と急速に移行するとしている。

いつの時代にも変化はあった

が、それらは比較的ゆっくりと

訪れたため、十分に対応ができ

た。しかし、「あらゆる人間の

能力と経験が、わずか数十年の

うちに昔の面影を何らとどめぬ

ほどに変化するであろう断絶の

時代」を迎えつつある現在、私

たちは真剣にその対策に取り組

まねばならないとしている。

著者は、新しい動きや変化を

捉えるのに次のような提唱をし

ている。これはOECDの「コ

ンピュータおよびテレコミュニ

ケーションに関する会議」でM

・ポラートとE・パーカーによ

って提案された「情報産業」を

独立のカテゴリーとする考えを

さらに発展させたものである。

これまで一般的に用いられて

きた労働力三部門分析は、高度

に技術化された経済のなかで時

代遅れなものになっている。そ

れは第三次産業のなかで多発し

ている変化が考慮されていない

からである。そこで有形サービ

スを第三部門、情報処理を第四

部門とし、今まで経済的にも統

計的にも無視されてきた家事勞

働、子供の世話、家庭での病人

や老人の介護、DIY（日曜大

工など）、コミュニティワーク

等を評価し独立の第五部門とし

た。「来たるべき社会」にあっ

ては、この第五部門の重要性が

増大するとしている。

このような考え方をもとにし

て雇用、情報、教育など多方面

にわたり論じている。問題点を

指摘しその対応を求めめるだけ

はなく、考え方や価値観まで私

たちに問いかけている。

「未来は人間の手のなかに」と

いわれるが、こうした技術革新

の波とともに、さらにもう一つ

の大きな時代のうねりがある。

高齢化社会の到来とこれに続く

高齢社会は、未知との遭遇とど

もいう一抹の不安を私たちに与

える。この問題も単に老人福祉

の観点からだけでなく、より

広い視野——「来たるべき社会」

全体のなかで検討されねばなら

ない。

一般に、福祉行政とそのサー

ビスにはトランスファアの原則

（弱者救済に要する行政経費を

強者が一方通行的に負担するこ

と）総合研究開発機構・地方自

治研究資料センター共編「都市

化時代の行政哲学」が働くこ

いわれる。著者の主張を現在の

行政施策にそのまま接木をする

ことは、カリフォルニア州の納

税者の反乱を想起するまでもな

く、市民的コンセンサスを得る

のはたやすいことではない。し

かし長寿の人が大幅に増え、経

済活動に従事する人とそうでな

い人の割合が劇的に変化する時

代を迎えつつある今、新たな

発想が求められている。「来た

るべき社会」を余暇・共生・連

帯のゴールデンエイジとする

か、大量失業の長期化が社会を

傷つけ、強者と弱者の対立・闘

争の時代とするのか。

高台の見張り（著者）が、眠

れる者（私たち）へ「目を覚ま

せ！」と呼びかけ警鐘を打ち鳴

らしている。

「読書は心の糧」といわれる。

本書は主食（教科書）という

よりも、山椒の味なのかもしれ

ない。香気、辛味について大い

に議論していただきたい。

（企財局都市研主査 下嶋邦明）